



覗く眼

第4回

第4回

話が途切れると突然、源治が立ち上がった。田部が、小さく身を震わせる。

「あの~」

遠慮がちに、源治を見上げる。

「タバコだよ、タバコ」

源治は指をハサミのようにして口にあて、タバコをふかす真似をした。

「はあ、それだったら」

田部は汚れてひしゃげたアルミ製の灰皿を差し出してきた。

「いや、いい。こんな大自然の中に来てるんだ。タバコも空気の美味しい所で吸わないとな」

源治は田部のすすめる灰皿を制し、駐在所を出ていく。

「おやっさん」

沢井も立ち上がった。

「あなたも、タバコですか？」

「いや、自分は吸わないんです」

照れたように沢井は頭をかくと、源治の後を追った。

「空気の美味しいところでタバコなんて」

「似合わないか？」

沢井が駐在所の裏手にまわり苦笑いすると、ちょうど源治がタバコに火をつけたところだった

。「あの警官、何か言ってたか？」

「いえ、自分にもタバコですか？ って聞いてきたぐらいです」

「ふーん」

源治はいっぱいに吸い込んだタバコの煙を、今度は思い切り吐き出した。

「どうかしたんですか？」

「いや」

源治はタバコをまた、口にくわえなおす。

「ところで、やっぱりあいつが気になりますか」

沢井は話題を変える。

「ああ、佐倉様の若ってのな」

源治がまた、煙を吐き出す。そじてじっと一点を見つめながら、真面目な調子になった。

「あいつの目はな、人を殺せる目なんだ」

「じゃあ、やっぱり」

沢井が色めき立つ。

「馬鹿野郎。人を殺せるってのはな、殺したのとは違うんだ」

そう言って源治は沢井の顔をじっと見つめ、突然笑い出した。

「訳のわからない、って顔だな」

「え、ええっ」

沢井が頭をかく。

「普通はな、人ってのは殺しなんかできねえもんだ。よっぽど強い憎しみが積もり積もってとか、突発的に刺しちゃったとか、そんな時だな。殺せるのは」

「はい」

「後はまあ、戦争とか特殊な状況だな」

源治はまた、沢井が頷くのを確認する。思えば、源治のこんな話をまともに聞く同僚は今、沢井ぐらいかもしれない。

「犬や猫、鳥だって殺せないのが人間だ。でもな、ごくたまに、アリやゴキブリを殺すみたいに躊躇なく、人を殺せる人間もいる」

「それが、あいつの目なんですな」

源治は頷き、続ける。

「だからって言って、そいつが人を殺したかどうかはわからねえがな。そんな心持のまま何もしないで一生を終える人間だってたくさんいるんだからな」

「あの包帯の野郎は、どうなんですかね」

「馬鹿野郎。それを調べるために、警察がいるんじゃないか」

源治は沢井の頭を、軽くこずいた。

「ああ、おかえりなさい」

源治と沢井が駐在所に入ると、田部がちょうど受話器を置くところだった。

「電話かい？」

「ええ、夫婦喧嘩の仲裁とかです。この村の事件なんて、こんなものばかりだったんですがね」

田部は深いため息をつく。

「行かなくても、良いのかい？」

「そんな犬も食わないような用件でいちいち電話してくるなって、怒鳴ってやりました」

田部はどこか芝居掛ったように、笑ってみせた。

「今日はお疲れでしょう。この村には宿なんてありませんが、空き家になっている所がありますんでそこをお使ください」

「空き家ですか？」

田部の言葉に、沢井が顔をしかめる。

「大丈夫ですよ。布団なんかはありますし、食事も村の者から運ばせます」

「ああ、頼むよ」

源治は何食わぬ顔で、コートに手をかける。

「では、ご案内します」

不安そうな顔の沢井の肩を、源治が励ますように二回、ポンポンッ、と叩いた。